

# 「ウェブ炎上」・匿名・プライバシー コンピュータネットワークでの生活

江口聡

加茂直樹・初瀬龍平・南野佳代・西尾久美子編、  
『現代社会研究入門』、晃洋書房、2010  
に載せた原稿（校正前）  
参照等は書籍のものでおねがいします。

「炎上」というコンピュータネットワークでよく使われる言葉がある。ブログや掲示板などでコメントの書き込みが殺到し、誹謗中傷やプライバシー暴露などが行なわれるトラブルである。個人情報や画像の流出によって一般市民が突然ネット利用者たちの注目を浴びてしまうこともある。こうしたネットワークでの事件はなぜ起こるのか、わたしたちはネットでどう生活すればよいのか。

## はじめに

我々は電子メールやウェブ (WWW、World Wide Web) に代表される技術によって、ほとんどコストをかけずに意見や大量の情報を交換し、自分の生活や意見を世界中に発信できるようになった。しかしこれらの情報技術 (IT) は同時に、さまざまな新しい社会的な問題を引きおこしている。また、コンピュータネットワーク (以下「ネット」を表記する) では、ポルノや薬物、自殺手段など「有害」と呼ばれる情報さえ、簡単にほぼ匿名で流通させることができる。他人に関する悪意ある情報や意見を流すこともできれば、意図せず他人のプライバシーを暴露してしまうこともありうる。他にもさまざまな仕方では情報技術によって我々のプライバシーは危険にさらされていると言われる。そこで、ここではネットでの匿名性とプライバシーに関する問題を概観することにしよう。

## 1 インターネットの特徴

この本の読者のほとんどなんらかの形でネットを使用していることだろうから、詳しい紹介は必要ないだろう。ネットによるコミュニケーションの主要な特徴は、それが (1) グローバルな多対多の双方向通信であり、(2) 匿名性が高く個人の特長が難しいこと、そして (3) コピー、保存、そして検索が簡単なことである。

従来からあるテレビや新聞雑誌といったマスコミュニケーションメディアは、一人 (一社) の情報発信を多数が受信するという形であり、情報の流れは基本的に発信者から受信者への単方向である。また従来の電話では二人が双方向のコミュニケーションを行なうことができるが、基本的に一对一の通信である。これら旧来のメディアに対し、ネットを使った通信では、誰もが発信者でもあり受信者でもある。文章や写真、動画などを閲覧するだけでなく、メールで一对一のコミュニケーションを行なうこともできれば、インターネットブログ

(Blog) や掲示板への投稿といった手段で誰もが送信者になることができる。世界中どこであろうとも、ネットにつながっていれば同じ程度の料金で通信でき、地域や国境は他のメディアほど重要ではないという意味でグローバルである。

またネット上では匿名での活動が容易であり、その情報を発信しているのがどこの誰であるかをはっきりさせることなく活動が可能である。多くのウェブ掲示板では匿名や筆名を用いたコミュニケーションが行なわれており、ある投稿をした人物がどこの誰であるのか他の利用者にはわからないことが多い。ブログなどで自分の意見や日常生活を公開している人々の多くも単なる筆名の場合が多い。

さらに、ネット上の情報はすべてデジタル化されており、そのため情報の質を劣化させることなくまったく同じままでコピーすることが可能である。従来のカセットテープやビデオテープ、コピー機などによる複製では何度もコピーを繰り返せば質が劣化することは避けられなかったが、画像、音声、動画などといったデジタル化されてしまえば、それを何度複製しようともまったく質が低下することはない。そうした情報のほとんどはいったんネット上に公開されれば Google 社や Yahoo!社を代表とする検索エンジンによってさらに収集されコピーされ、簡単な操作によって検索され再利用される。

これらの特徴がこれまでになかったさまざまな社会的問題を生じさせている。まず身近な事件から見てみよう。

## II 「ウェブ炎上」

ネット利用者の間でのトラブルが多く発生することは、コンピュータ通信が一般的になった 1980 年代から注目され、「フレーム」(炎) やフレーミングと呼ばれていた。ただし当時のネットの利用者はまだ比較的少数で、また各通信会社ごとに区分けされていたために問題が大きくなることは多くはなかった。2000 年前後にネットの利用者が爆発的に増大したことでこうした騒動の規模は格段に大きくなったといえる。また、多くの人に読まれることを予想しなかった記事が問題にされ、無名の一般市民が突然注目を浴び、その私生活が暴露され嘲笑されるようになったのもネット利用が拡大したことが一因だろう。

たとえば、ウェブ掲示板等は匿名での活動が容易であるために、頻繁に他の人々や企業等の名誉を毀損するような投稿が行なわれる。

事例 1 2001 年、最大規模のウェブ掲示板である「2ちゃんねる」<sup>\*1</sup>上で実在の動物病院の評判を下げる悪意ある投稿があいつぎ、管理者が投稿の削除を行なわなかったために病院が裁判に訴える事件が起きた<sup>\*2</sup>。

他にも犯罪を犯した少年の実名を公表したり、特定の個人の氏名や住所を公開した上で、プライバシーを暴露したり、悪意ある風評を流すといった行動をする者はあとをたたない。

日記等をネットに書き込むブログサービスが一般化した 2003 年ごろからは、「炎上」や「祭り」という言葉をネット上で目にするようになった。ブログなどが「炎上」するとは、なんらかの人目を惹く記事を掲載したブログに、多くの批判的なコメントが寄せられ、そのことが掲示板で話題になり、さらに多くのコメントが寄せられるといった状況を指す。「祭り」も同様になんらかの記事や情報に多くのネット利用者が注目し、多くの書き込みが行なわれる事態を指す。多くは有名人や芸能人の記事が話題にされることが多いが、平凡な市民が、その自覚なしに突如人々の注目を浴びてしまうことがある。

---

\*1 <http://www.2ch.net>。

\*2 『判例時報』第 1810 号 p. 78。

事例 2 2003 年、居酒屋で自分の子供が騒いだことについて店員が注意したことに激怒し、夫婦で店員に土下座させ謝罪させたという一般主婦の日記記事が多く批判にさらされた。ブログその他からこの夫婦の過去のさまざまな行動が暴かれ、夫婦を非難する多数の書き込みがなされ、ブログは閉鎖された。

事例 3 2008 年、大学教員のブログが光市の母子殺害事件について一般人の見解に反する見解を掲載したとされ、ブログのコメントや掲示板で非難され、一部の人が大学当局に抗議電話を行ない、結果として教員は大学から処分されるという事態となった。

事例 4 有名企業の社員の私的なヌード写真がネットに流出し好奇の目にさらされ実名や勤務先が暴かれた。いまでも画像が一般に公開され続けている<sup>\*3</sup>。

こうした現象では、上で挙げたネットの三つの特徴が大きなポイントになっていると考えられる。第一に、ウェブが誰でも発言し読むことができるということは、ネット上では意見や価値観や感じ方が大きく違った人々と出会うということである。価値観が多様化した現代社会では、ある人々にとっては当然に思える意見が別の人々には非常に不快なものと感じられることは多い。つきあう人々の範囲がほぼ定まっている日常生活ではそうした人々どうしが出会う機会は比較的少ないのだが、日常生活では出会わないはずの人々がネットで意見を戦わせることになる。またそこに実社会での社会的地位や権威はさほど重要ではない。まずこれらのことがトラブルの原因と考えられる。

第二に、そうした騒動には非常に多数の匿名の参加者がかかわっている。ウェブ掲示板やブログ利用以前の形態の多くでは、利用者は実名や素性を明かさずには利用できないことが通常だった。しかしウェブ時代では多くの利用者が匿名で読み書きの活動することを選択している<sup>\*4</sup>。ネットの匿名性には数多くの長所がある。匿名であることによってわれわれは自分の正直な体験や意見を告白することができ、また、社会的な地位や職業、性別、その他のステレオタイプにとらわれることなく自由な議論を行なうことができる。「ネットは自由な社会だ」と主張されることがあるのは、ひとつには、ネットでの匿名・筆名での活動がわれわれを既存の社会的地位から解放してくれるからである。

しかし一方、匿名の個人の集団が暴徒化しやすいことは古くからよく知られている。群集によるリンチ、デモをきっかけにした暴力や略奪行為、サッカーファンのスタジアムでの攻撃行動など、多くの不幸な出来事が集団によって引き起こされる。従来の社会心理学の研究では、群集のなかでは個人が匿名の人物となる脱個人化 (deindividuation) がこうした反社会的な行動の原因の大きな要因であると指摘されている。匿名性によって責任が分散している状況では、個人は、(1) 自分の行動の監視がおろそかになる、(2) 自分の行動が社会的に是認されるかいないかについての関心が低下する、(3) 衝動的に行動しやすくなる、(4) 理性的に行動する能力が低下する、といった状態におかれる<sup>\*5</sup>。こうした暴力的で攻撃的な状況が、ネット上で非常に引き起こされやすくなっている可能性がある。

第三に、いったんインターネットに公開された情報は簡単にコピーすることができるために、もとの記事を削除したとしても、それが他の場所に保存されていることが多い。いったん撮影され公開されたヌード画像等は、いったん削除されても誰かが再び公開することが繰り返され、もはやネットから消えることはない。また注目されていなかった過去の情報も検索エンジンその他の場所に保存されているため、いったんなんらかの情報をネットで公開してしまえば、もうその情報は消えることはないと考えてもよいほどである。そうした情報

<sup>\*3</sup> 『裏モノ JAPAN』2009 年 8 月号別冊『実録！ブログ炎上』鉄人社、2009。このような情報はネット上に「事件まとめサイト」が作られていることが多い。「ブログ炎上」などのキーワードで検索してみるとよい。

<sup>\*4</sup> 総務省情報通信政策研究所 (2009)

<sup>\*5</sup> Eysenck (2000, 邦訳 p. 825)

の検索は非常に容易であるため、興味をもった利用者が複数の情報源（ブログ、SNS<sup>\*6</sup>、各種の公式記録）から情報をつなぎあわせてある個人の全体的なプロフィールを調査することは難しくない。こうしてすでに日々蓄積されている情報と検索技術によって、「公人化」された一般市民が攻撃され嘲笑される事件があとをたたないのである。

### III IT とプライバシーの危機

ところで、実は上で指摘した匿名性は一般の利用者から見た場合の「見かけ」だけのものにすぎない。実際にはコンピュータやネットの利用は日々記録されている。いくつか例を見てみよう。

- (1) 企業や大学のような組織では、ほとんどすべてのコンピュータの使用状況が記録に残されている。管理者は原理的にはどの端末機にどのユーザーがログインしたか、そのユーザーが web でどんなページを見たかを調査することができる。
- (2) 大学や職場ではそのメンバーほとんどがメールアドレスを持ち、内外との連絡に用いている。多くの企業ではネットの管理を内部で行なっているため、ネットワーク管理者や雇主が、従業員が誰とどのような内容のメールを交換しているか、どのような Web を閲覧しているか、さらには、簡単な仕掛で、1日あたりの作成文書数やキーボードのタイプ数まで、さまざまデータを本人に知られることなくチェックできるようになっている。ネットは、以前にもまして従業員のモニタリングを可能にしているのである。
- (3) ネットにおける電子メールは暗号化されていないかぎり、この配送経路の多くの場所で盗み読みが可能である。通常、コンピュータの管理者は、技術的には他人のメールも簡単に読むことができるし、また、ネットはさまざまな組織とコンピュータの集合体であるため、PGP などの暗号ソフトウェアを利用しなければ、その配送上での機密性はほとんど保証されていないと言ってよいだろう。
- (4) ネット上で我々が Web を読む際には、「クッキー」がサーバからブラウザに送られていることがある。「クッキー」は WWW サーバがクライアントに送信してくるデータで、そこには、入力した名前やパスワード、閲覧したページ、閲覧した日付等がおさめられている。これにより、一度その Web ページから離れても、再びアクセスした際にサーバがクライアントに保管しておいたクッキーを読み取ることで、個人（正確にはそのブラウザ）を特定し、再び以前の続きなどを行なうことを実現している。一度設定した Web ページの閲覧方法の保管や、掲示板に登録した名前や電子メールアドレスの保存、オンラインショッピングのページで、過去に購入したりした商品の情報などを記録しておくことができる。原理的に、このクッキーを持ちいて、サーバー側で、インターネット上のどのマシンがそのサーバーにアクセスしたのか、そのマシンは他にどのような WWW サーバーを見ているのか、さらには、サーバーに入力した文字列（メールアドレスやパスワードなど、名前等）さえ保存し、それを利用することができる。
- (5) 人気のある無料メールアドレスサービスでは、自分の氏名などの情報だけでなく、友人などの相手のメールアドレスや氏名なども要求されることがある。このようにして、膨大な個人情報がネット企業の手に渡っているわけである。企業による Web でのさまざまなサービスでは、多くの場合実名や住所、電話番号、生年月日等の入力が必要される。デパートやスーパーマーケットその他での買物をクレジットカードや電子カードなどによって行なえば、企業がこれらの購入情報を収集することもたやすい。そ

---

<sup>\*6</sup> Social Network Service。実生活での人間関係をネット上に構成するサービス。国内では mixi (<http://mixi.jp>) や GREE(<http://gree.jp>) が有名である。

うした情報の流通には法的な規制がかかっているが、意図せぬ情報の流出のニュースは頻繁にメディアを賑わせている。

もし、なんらかの組織が、(4) や (5) で入手したデータを、名前や生年月日、住所などを鍵にしてつなぎあわせれば、ある人物が、どこに住み、誰と交際し、どんな車に乗り、どんな経済状態で、今月どのような食生活を送っているかまで、非常に詳しい輪郭を簡単に描くことができるようになる。これらの個人情報の利用は、ビジネスの上では有益であろう。市場調査会社や金融機関や政府などが我々の情報を収集分析し、その情報が我々がこれらの機関によってどう扱われるかを決定することになる。雇用状況や年収といった情報によって、我々の「信用」が決定され、我々が、例えば金融機関から融資を得られるかどうか決定される。我々はいまだに、誰が自分についての情報を入手し使うのかを決定することはできないのである。

さらに、我々は通常自分のもっているデータが「どこ」にあり、誰がそれを調べることができるかを十分意識していない。たとえば次のような事例があげられるだろう。

- (6) 自分のコンピュータの特定のハードディスクに保存したつもりのファイルが、それが破損したときのために保存するバックアップのために別のディスクや CD-ROM にコピーされたままになり忘れてしまうことがある。企業や大学などの大規模サーバーに保存したデータも、通常機器の故障に備えて「バックアップ」され複製が作られている。コンピュータを使うたびにわれわれは情報をまき散らしている。
- (8) 最近人気の Web アルバムサービス (Google 社の Picasa Web Album など) や地図サービスなどのデータが、(おそらく本人の意図に反して) 誰も見られる状態になっていることもよく見うけられる。
- (9) 無料でアドレスが獲得できるフリーメールサービスでは、ネット上にアドレス帳を保存している。このデータを使って、自分の知人があるサービスを利用していることを発見できることがある。たとえば SNS で最近人気がある SNS の「twitter」や動画サービスの YouTube では、Google その他のメールサービスのアドレス帳を利用して、サービスを利用している知り合いを (本人の意に反して?) 発見し、どのような活動を行なっているかを観察することができる。

まだある。我々が自分の行動をブログや SNS に書き込むことによって、自分だけではなく、自分の周囲の人々の行動や言動を記録することになる。

- (10) たとえばあなたがブログに書きこんだ「今日は A 君と映画に行った」という記載は、A 君の意に反して (たとえば A 君は会社をずる休みしていたかもしれない) A 君の行動を他の人々に知らせることになる。また B 君がブログなどに記録した C 君のコンパでの言動をガールフレンドや就職先の企業の人が読むことになるかもしれない。

IT による情報革命は、われわれが意識しないところでわれわれのプライバシーを脅かしているのである。

#### IV 「プライバシー」の重要性

上のような「プライバシーの危険」については、過剰な危惧が抱かれているのではないかと見る人々もいる。ネット技術者・管理者の「倫理綱領」はすでに整備されているし、また、国内では 2005 年より各種の個人情報の保護に関する法律が定められ制度の整備が進められている。「プライバシー」に過剰に敏感な人々は、なにか後ろ暗い秘密をもっているのではないだろうか (たとえば会社をずる休みして映画に行った A 君のように)。「表裏のない人」という誉め言葉があるように、道徳的に正しくうしろめたいことのない生活をしてい

る人々にとっては「プライバシー」はそれほど重要なものではないのではないだろうか。むしろ、そのような他の人に隠された部分がなくなることが社会生活の管理や安全のために必要なのではないだろうか。反社会的な行動や卑劣な人々、人を騙す言動などが暴かれるのはよいことなのではないだろうか。われわれはもっと自分のふるまいや考え方を人々に知らせ、またお互いに知りあった方がより明るく透明な社会になるのではないだろうか。なぜわれわれは自分の行動を他人に隠したいと思うのだろうか。なぜ他人に知られない私<sup>プライベート</sup>的な領域を必要とするのだろうか。こうした疑問に答えるには哲学的な考察が必要となる。

まず、一般に使われる「プライバシー」という言葉は、非常に広く、また曖昧な概念であることに注意しよう。実際、我々は「自分の部屋に勝手に入れられたくない」「手紙や日記を読まれたくない」「過去のことを詮索されたくない」「いま何をしているか他人に知られたくない」「裸でいるところを見られたくない」「一人ぼっちになりたい」など、さまざまな場合に、プライバシーという言葉思い浮かべる。これらの状況の多様性は、プライバシーという概念の広さと多様性を示しており、この言葉の厳密な定義は難しい。まず、「プライベートなことがら」とされる領域を分析してみよう。

プライバシーと呼ばれる領域には、まず第一に、内面的な思考や感情がある。我々は内心のことがらを他人に打ち明けたくないことがあり、それを詮索する人々を迷惑であると思うことがある。第二に、恋愛関係や友人関係は基本的にプライベートな事柄であり、当人たちが他に知られることを望んでいなければ、それを赤の他人が詮索したり、みだりに公けにすることは望ましくないと思われる。第三に、健康状態や経済状態などの個人情報、医者や債権者など、それに関わることが正当とみなされる人々以外には知られるべきでないと考えられている。仮に、それを誰かに知られたとしても実害はないと思われる場合でも、私は誰が誰がそれを知るかを自分でコントロールしたいと思うだろう。また第四に、我々は自分の部屋や自分の机など、一人になる私的な物理的空間が必要である。第五に、我々は誰かに監視されていることを好まない。もちろん、ほかにも我々の「プライバシー」の概念に関わる状況は様々あるだろうし、何をパブリックに、何をプライベートにしようとするかは文化や教育や環境によって変わるかもしれないが、おおやけにされないプライベートで個人的な部分が我々の生活のなかで非常に重要な部分であるという直感が広く共有されている。

さて、このような私的な領域・個人的な情報はなぜ我々にとって重要なのだろうか？簡単に考察してみよう。

第一に、プライバシーは安全のために重要である。たとえば一人暮らしの女性の住所氏名等が犯罪者たちの手に渡れば、格好の標的になりうる。ブログや SNS から、一人暮らしかどうか、だいたい住居先や生活の時間帯、バイト先、交友関係などを推測することはやさしい。プライバシーが持つこのような直接の利害はわかりやすい。そうした個人情報が不特定多数の手に渡ることはまったく危険でありうる。

第二に、プライバシーは生活上の戦略や他人との競争のために重要である。われわれの生活には多くの社会的葛藤や競争が含まれている。もし他人に自分の考えや戦略を知られてしまえば、社会での競争において不利になることはまちがいない。また、医療情報が知られることによって、生活が脅かされることがある。性病やアルコール依存症の病歴が知られば、結婚生活が破綻したり、職を失う結果になることが考えられる。

第三に、さまざまな偏見が存在する現実の社会では、そのような偏見にさらされないために他人に知られたくないことも多い。出身地や性的な嗜好が就職には無関係であるとしても、現実にはそのために就職において差別されてしまうかもしれない。

また、第四に、我々は、他人から「監視されている」ことを意識することによって行動を変えるものである。われわれは一人で部屋にいるときに平気で行なうようなことも、誰かが見ていればしないことが多い。もし誰かが自分を見ているということを意識すれば、我々は自由に自分の行動を計画したり、実行したりすることができなくなることがしばしばである。たとえばメールが誰か他の人に覗かれていることを意識すれば、我々は本当に言いたいことを相手に伝えることができなくなるだろう。

また、第五に、プライバシーが人間関係において果たす重要な役割がある。社会学者チャールズ・フリード<sup>\*7</sup>や哲学研究者ジェームズ・レイチェルス<sup>\*8</sup>は、プライバシーは親密な人間関係を保つ上で重要であるとする。フリードによれば、我々のよき生活のためには恋愛関係や友人関係などの親密さと信頼によって結びついた特別に親密な関係が必要である。そのためには、内密の事柄を親密な関係だけで共有するためのプライバシーが必要である。つまり、たんなる知り合いと親友との違いはなんだろうか？フリードは次のように指摘している。

友人どうし、恋人どうしであるために、ひとはお互い深く親密にならなければならない。親密さとは、他の人々とは共有していない自分たちの行動や考えや感情についての情報、また共有しない権利もっているそうした情報を〔特定の人のあいだで〕分かちあうことである。・・・愛や友情は、さまざまな他の種の権利の贈り物　たとえば物品や奉仕といった贈り物　によって表現することもできるかもしれない。しかしプライベートな情報を分かちあうことがなければ、こうした贈り物だけでは愛や友情を成り立たせることはできない。物品については気前よく分かちあってくれるが、自分自身を分かちあわない人は友人とはいえないし、自分にかかわるすべてを誰とでも分かちあう人を友人だとはとても考えることができない　恋愛のためにプライバシーが必要なことがよくわかる例だろう。<sup>\*9</sup>

つまり、フリードによれば、われわれは特別な関係を維持するために特別な人にしか公開しないような情報の領域をもつことが必要なのである。

レイチェルスはこれに加えて次のように指摘する。

ある他者に対して私たちが持つ異なる社会関係に応じてふるまい方を変えるのは単なる偶然ではない。むしろ、異なるふるまいが、異なる関係を（部分的に）規定するものであり、したがって、異なる振る舞い方は、異なる関係を異なったものにする重要な一部なのである。例えば、友人関係には、感情的な結びつきや特別な義務・・・が含まれる。しかしまた、友人といっしょにいることを歓迎し、秘密を打ち明け、自分自身について話し、他の人々には話したり見せたりしない自分の側面を見せることもまた、友人を持つということの重要な一部である。私がある人を自分の親友だと思っているとしよう。彼が仕事について悩んでいて、仕事でクビになることを恐れていることを知ったとする。しかし、彼は他の何人かにはそのことを相談する一方で、私にはそのことについてさっぱり話してくれなかったとしよう。次に、私は彼が詩を書くこと、それが彼の人生において非常に重要な部分を占めるということを知ったとしよう。しかし、彼は他の多くの人々には自分の詩を読ませる一方で、私には読ませてくれない。さらに、彼は私に対してふるまうよりも、その他の友人にはよりくだけた態度で接しており、私とつきあうより彼らとつきあうことの方が多いうだということを私は知る。彼のふるまい方について、なんらかの特別な説明がなければ、私は、自分は思っていたほど彼の親友ではないと結論しなければならぬことになるだろう。

同じようなことが、他の種類の人間関係　たとえば社長と従業員、聖職者と会衆、医者と患者、夫と妻、親と子などについても言える。それぞれの場合に、人々の人間関係には、おたがいにどのように振る舞うのが適切か、さらには、おたがいについてどのような知識をどの程度持つのが適切かというこ

<sup>\*7</sup> Charles Fried, "Privacy", *The Yale Law Journal*, Vol.77, 1968

<sup>\*8</sup> James Rachels, "Why Privacy is Important", *Philosophy & Public Affairs*, vol. 4, 1975

<sup>\*9</sup> Fried (1970, p. 142. 邦訳は江口による。)

とが含まれている。<sup>\*10</sup>

レイチェルズは社会での多様な人間関係を維持する枠組としてプライバシーは重要だと考えるのである。我々は、自分と、親友、上司、部下、配偶者などの様々な人間関係を維持するために必要である。我々は人間関係に応じて態度を変え、またそれは生活の上で必要なことであるが、もし皆が私について同じことを知っているならば、このような人間関係の多様性が維持できない。

たとえば読者が mixi のような SNS に参加すれば、そこに反映されている人間関係は中学の友人、高校の友人、大学の友人、バイト仲間、単なる知り合い、恋人、教師、親戚、ネットだけの知り合いとさまざまになるだろう。われわれは人間関係をコントロールするためにグループごとに「顔」や「キャラ」を使いわけているのだが、それが不可能になる時代が来ているのかもしれない。親と子、上司と部下、教師と生徒などが、お互いの生活上の不満や悩みや恋愛関係について知ることはそれほど望ましいことではないかもしれないし、一方で、そうした新しいコミュニケーションは新しい社会を作り上げるのかもしれない。これらは IT と現実社会がこれからどのようにかわっていくかにかかっている。

## まとめ

これまで見て来た以上にネット上にはこれまでになかったさまざまな問題と危険が潜んでおり、利用には十分な知識が必要である。しかし誰もが指摘するようにネットを利用して人々と交流するのは楽しいことであり、また有益な情報も入手できる。より楽しくネットを利用する上でも、その特性と危険を理解しつつ積極的に利用してほしい。

## 課題

1. ネット上の各種の事件やトラブルを探してみよう。http://www.google.com のような検索エンジンで「炎上」「ネット事件」などで検索してみるとかなりの情報を入手できる。
2. ネットで自分の知っている人物についてどの程度のことを知るができるか試してみよう（たとえばゼミの先生についてどんなことを知るができるだろうか？）あなた自身についてはどうだろうか？
3. 推薦図書からプライバシーと匿名性の重要性について考えてみよう。

## 参考文献

- Eysenck, Michael (2000) *Psychology: A Student's Handbook*, Psychology Press. (マイケル・W・アイゼンク『アイゼンク教授の心理学ハンドブック』, 白樫三四郎他監訳, ナカニシヤ出版, 2008).
- Fried, Charles (1970) *An Anatomy of Values: Problems of Personal and Social Choice*, Harvard University Press.
- Rachels, James (1975) "Why Privacy is important," *Philosophy & Public Affairs*, Vol. 4. (ジェームズ・レイチェルズ, 『倫理学に答えはあるか: ポスト・ヒューマニズムの視点から』, 古牧徳生・次田憲和訳, 世界思想社, 2011 に収録).
- 総務省情報通信政策研究所 (2009) 「インターネットと匿名性」, 調査報告書, 総務省情報通信政策研究所.

---

<sup>\*10</sup> Rachels (1975)



## 推薦図書

- アダム・N・ジョインソン (2004) 『インターネットにおける行動と心理』 北大路書房
- デボラ・ジョンソン (2002) 『コンピュータ倫理学』 オーム社
- 大谷卓史 (2008) 『アウト・オブ・コントロール：ネットにおける情報共有・セキュリティ・匿名性』 岩波書店
- 荻上千キ (2007) 『ウェブ炎上：ネット群集の暴走と可能性』
- 三浦麻子・森尾博昭・川浦康至（編）(2009) 『インターネット心理学のフロンティア：個人・集団・社会』 誠信書房